

5.町野町の結婚儀礼について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5019

5. 町野町の結婚儀礼について

趙 婷 婷

- I. はじめに
- II. 伝統的な結婚儀礼
- III. 結婚儀礼の時代変化
- IV. 変化要因の考察
- V. おわりに

I. はじめに

人の一生の間で、結婚式ほど華やかな儀礼はない。

結婚儀礼が、結婚する男女ふたりだけの問題ではなく、両者の属する親族集団や社会関係にも関係することは、さまざまな社会や時代についても言われることである。一方、結婚の習俗は地域によって多様だが、近年の社会変化の影響で、伝統的な習俗がだんだん減滅するにしたがって、結婚儀礼も、昔のような伝統的な儀式から変化してきた。

このような問題意識に立ち、本章では、曾々木と鈴屋の結婚儀礼を取り上げ、儀式とその変化に見られる意味について考察する。以下において、II.ではまず伝統的な町野町の結婚儀礼の一般的手順を記述し、その中に見られる儀式の意味について述べたあと、III.では婚姻の事例を年代順に紹介し時代の変化を明らかにする。IV.では結婚儀礼の変化についてまとめながら、その要因を分析しておきたい。

II. 伝統的な結婚儀礼

1. 結納

縁談が整ったしるしにとりかわされるのが、結納であり、婚約の意味を示すものである。

結納は、両家が新たに姻戚関係を結ぶにあたり共にする酒と肴を意味する「ゆいのもの」が始ま

りとする説と、申し込みを意味する「いよいよ」がなまったという説の二通りがある。昔は、夫となる人が妻となる人の家に酒と漬物などを持って挨拶に行くと、その後から両家の行き来が許されたという。また、結納には、本人だけでなく、第三者としての仲人を混じって、証人になるので、この酒を仲人にも飲ませた（新谷 2001 : 32-33）。町野町でもかつては、このような形の結納が一般的で、1965（昭和40）年頃までは行われていたようだ。このように、本来の結納は両家の結合を確認するための儀礼的な贈答慣行であったが、時代を経るにしたがって、結納品は徐々に物品から金銭へと変化してゆく。また、結納の場所も自宅からホテルへと移動しているようだ。

2. 結婚式

町野町では、結婚式を嫁取りといい、嫁取りの式は親戚・知人へ案内し、ムコの家から迎えに行く。嫁取りの際には、嫁が婚家に向かう途中、人びとが縄を張って妨害し、祝儀をねだるといった習俗があった。嫁側は、縄を張っている人に酒と「おかず代」を渡して、通してもらわなければならない。この習俗は「ナワバリ」とか「シメナワハル」などと言い表わされる。その縄はありきたりのものがあるが、わざわざ若衆が二、三人寄ってないあげ、ことばどおり注連縄（しめなわ）にするのもあった。嫁入り先の村では若い衆が手拭でほおかぶりをし、またかがり火を焚く畳を敷き袴を着用して迎えたというところもある。子どもや主婦などは普段着で待つ。縄の張り方は、一度張って祝儀をもらえば前方に走って仕掛けるものもあるが、一度だけ張る場合が多いようだ。

金銭や酒をねだる者に対し、それらを配る方の心意はどうであろう。金銭や酒を関所逃れのためでもあろうが、また祝意を分かたつためにふるまうことであり、これから在住する村の人に対し承認を請うためである。手段の善悪は別として、祝意をもって迎えるのであるから、これがないと相手にしてくれないということになり、いたって寂しい嫁入りだという。また縄を避けて通るのはぶざまな対応で、一生もの笑いになるという（今村 1978 : 54-55）。この習俗は今でも行われているところもあれば、行われていないところもある。

ナワバリ後、道具運びが夜にこっそりと行われる。花嫁側の家が、タンス、着物などを荷車やトラックで運んで、婚家に並べて、来た人に見せびらかすのである。

花嫁行列が婚家に着くと、「水合わせ」と「盃割り」という入家儀礼が行われる。お嫁さんが、婚家の玄関に入る時、生家と婚家の水を混ぜ合わせて一つの盃（茶碗）に注ぎ、花嫁に飲ませる。花嫁が飲んだ後の茶碗や盃を割り、細かい程めでたいという。茶碗や盃を割る行為には、花嫁はもう生家には戻らないという意味が込められている。

嫁は婚家に入り、神棚や仏壇にお参りして家族の一員になることを婚家の先祖に報告をする。

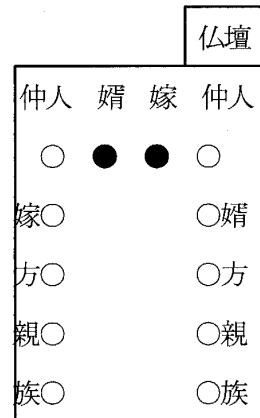
ここまでの結婚の儀礼は、様々な社会的矛盾や葛藤を回避するための呪術的な儀礼であると言われる。花嫁は生家を出て婚家へ入ることで「生まれ変わる」と考えられていたのであり、具体的に新

夫婦の離縁を忌み、花嫁の生家と婚家の結合を確認したり、嫁が婚家に早く定着することを願うという意味があった（八木 2004: 126）。

次は、ハバキヌキが行われる。ハバキヌキとは「嫁入りや婿入りの時、脚半を脱ぎ世話になります」という意味であり、町野町では昔から受け継がれている。かつては、どんなに遠方から嫁ぐ時でも歩いて嫁入り、婿入りをした。新婦、新郎はガバやシュロの葉で作った、「ハバキ」という脚半をスネに巻き、夜が白々と明けるころ家を出たという。現在は、このハバキを巻いたことにして式は行われ、足洗いの儀では、新郎の足をタオルでふいて、新しい足袋に葉履きかえる（北國新聞掲載『曾々木巡り』より）。

この後、ハバキヌキのご膳が出される。嫁をもらう家からもらえる家の親族に祝儀が渡される。干イワシ、黒豆、紅白まんじゅうなどが並ぶ。新郎新婦は、「まめに働くように」と皿いっぱいに広がった黒豆を皿の真ん中に集め、背中合わせに出されたイワシを腹合わせに

して変わらぬ愛を誓う。このときの席順は右図のようになり、嫁婿両方の親族が左右に居並び、婿方親族の代表が「それでは、ただいまからお近付きの冷酒を差し上げます」と挨拶し、盃は婿方から始まり、ついで嫁方仲人へ行き、婿方親族の上席からめぐっていく。最後に盃が婿方にかえってくる。この一巡によって、婚姻成立の承認が行われ、両家親族の関係も相互に認知されるのである。



ハバキヌキが終わったら、再び嫁が神棚・仏壇に挨拶した。

3. 披露宴

披露宴は2日に分けて行うのが一般的であった。1日目に参加するのは嫁及び両家の近親者で、婿は出席しないのが普通であった。親子盃をするところから披露宴が始まる。生家の親は結婚式に来てはいけないので、婚家の両親とお嫁さんとの間で盃を酌み交わした。今日のように祝言や夫婦盃がないので、婿は近所や友人の家に遊びに行ったり、家にいて2階から座敷で行われている祝宴を覗いていたり、台所で祝宴の酒の爛やいろりの薪番をしていたといわれている。2日目には村人や友人、遠い親戚などが呼ばれる。町野町では1965（昭和40）年頃までは披露宴を2日にわたって行う場合が多かったようだ。

III. 結婚儀礼の時代変化

「結婚式は今ではずいぶんと変わってきたが、以前はこんな風だった」と言って、地元の人が語

ってくれた。1940年代から1990年代にかけての結婚は以下のごとくである。

1. 曾々木のA氏（82歳女性）の例

Aさんは鈴屋の出身で結婚年齢は19歳、夫は曾々木の出身で25歳であった。当時の結婚平均年齢は、大体それぐらいであった。当時、普通であった親の決めた結婚であり、「事前にお互いに顔を知ることにはなかった」。Aさんは鈴屋から曾々木に行って、式を挙げずにすぐに結婚生活に入ったという。

2. 鈴屋のB氏（79歳男性）の例

Bさんが結婚したのは1947年のことであった。嫁は仲人が見つけてくれた。嫁が決まると「シルシ」と言って酒と漬物を、Bさんの家から女の家を持っていった。シルシは仲人が持っていくもので、仲人はBさんの母の兄であった。シルシを女の家を持って行き、女の家承諾を得てから、両家の親同士が仲人とともにお酒をあげ、嫁取りの日を決定した。

嫁取りの日、お嫁さんは夕方に親戚などに付添われて婿の家に向った。ここでも途中で縄を張り、通せんぼをしてお金やお酒を要求することが見られたが、これは主婦たちががしていたという。入家儀礼では、やはり玄関で水合わせと盃割りが行われた。

3. 曾々木のC氏（77歳女性）の例

Cさんは1949年に19歳で結婚した。親に「あそこへ嫁に行け」と言われると、Cさんは「はい」と言っ行って行かなければならなかった。「女性は20歳までに嫁に行かないと、ダラ（＝バカ）かと言われたので、親は行かせたかった」とCさんは語ってくれた。

結婚当日に、道に実際に縄を張って、通さないように子供たちに邪魔された。Cさんの前を歩く仲人がお金をばらまくと、子供たちがそれを拾って、通してくれた。お金の金額はたまに100円であって、あとは10円、5円であった。これは昭和30年、40年頃までのことであったという。また、披露宴はやはり2日に分けて行われた。その中、婿は出席しないで、婚家の両親との間で盃を酌み交わし、「親子盃」を行った。

4. 鈴屋のD氏（69歳女性）の例

Dさんは親戚のおじさんに紹介されて、1958年に22歳で結婚した。結婚前に劇場に、Dさんと夫になる予定の人とおじさんの3人で行ったが、おじさんがふたりの間に座ったので、ほとんど話せなかった。

結婚当日に、道具運び、ナワバリ、盃割りが一通り行われた。その後、神仏にお参りをして両家の挨拶が済むと、披露宴が始まった。式は婚家で二日間に分かれて行われた。やはりお嫁さんは他の部屋から出て来られなかった。

結婚式が終わって、両親が帰ったら寂しくて柱にすがって泣いたと語ったDさんであった。

5. 鈴屋のE氏（72歳男性）の例

Eさんには1960年代当時の一般的な結婚式の事例を教えてください。

娘の親から婚姻の承諾を得ると、仲人と娘親が酒を飲み交わし、結納の日を決める。結納の日には仲人が酒2升と漬物などを持参し婚礼の日取りを決めた。これは60年代前半まで行われていたが、この頃から、結納品には金銭が現れるようになって、場所も自宅からホテルへと変わってきているという。

婚礼の当日、嫁入り行列は途中でナワバリをされることが慣例化していた。これは村人たちの新しくきた嫁への歓迎と祝いの気持ちの表れで、仲人は子供たちには祝儀金や酒を渡して妨害を解いてもらうのであった。ナワバリ後、夜に嫁入り道具を運んだ。

嫁さんは婚家に着くと、玄関で水合わせと盃割りという入家儀礼が行われた。それから、嫁さんは婚家に入り、神棚や仏壇にお参りして、着物を奥でしめかえて戻ってきてから、「ハバキヌキ」が行われた。Eさんの方は紋つき袴から背広に着替えた。

披露宴は座敷でやって、村落の中の料理好きの人が料理主任として作ってくれた。

6. 鈴屋のF氏（67歳男性）の例

Fさんが自分の結婚式についてとくによく記憶しているのは、やはりナワバリのことである。

仲人が嫁さんを迎えに行き、自分の家まで行った。近所の若い衆が縄を張って遮った。そこを通るために、縄を張っている人に酒（1～5升程）と、「おかず代」（2000～5000円程度）を渡した。そのことについて、「家柄により縄を張られる本数は変化していて、今では行われているところもあれば、行われていないところもある」とFさんが語ってくれた。

なお、Fさんの結婚式には、ハバキヌキが行われたという。

7. 曾々木のG氏（63歳男性）の例

Gさんは1960年代後半に恋愛結婚した。当時は、お見合い結婚がまだ主流とだったが、恋愛結婚もぽつぽつと現れてきていたとGさんが語ってくれた。

式は神式で、真浦観光センター（ホテル）で挙げられた。にもかかわらず、ナワバリも行われた。Gさんの場合は車での嫁入りなので、対向車が道を塞いでしまうと、お神酒とご祝儀をあげて退いてもらった。お金は105円、205円など「ご縁があるように」と縁起をかつぐ金額で、小さな祝儀袋に入れて撒くということであった。

結婚式の翌日には、近所の人に饅頭と赤飯を配ってあいさつ回りをした。

8. 曾々木のH氏（53歳男性）の例

Hさんの場合は1970年代末のお見合い結婚であった。ナワバリ、水合わせ、ハバキヌキなどを一通り行ったが、これらの儀礼に詳しい人がおり、一通りの説明を受けながら行う結婚式であったという。

9. 鈴屋のI氏（42歳女性）の例

Iさんが結婚したのは1987年のことであった。自分は恋愛結婚であったとIさんは語っていた。結婚式は真浦観光ホテルで行われた。嫁を迎える途中で嫁の車にナワバリが行われたが、「縄はなんでもいい」ということだった。嫁入り道具について、昔のように「見栄を張る」ためではなく、ふたりで要るものだけの簡単なものにした。また、婚家では何も儀式をやらなくて、略式であったとIさんが語ってくれた。

10. 鈴屋E氏の息子（38歳）の例

Eさんの息子は27歳で、1歳年下の富山出身の女性と職場で知り合って、1996年に結婚した。結納は仲人を立てず、両家の両親が金銭で簡単に済ませた。勤め先が富山ということあり、結婚式は富山の式場で婿側と嫁側の親戚、友人、仕事同士、職場の上司などを招いて行われた。仲人は職場の上司が勤めた。ナワバリや水盃などの一連の儀式はなかった。

結婚式後には、一週間かけて新婚旅行をした。この頃になると、日本全国で新婚旅行がさかんになってきていたという。

IV. 変化要因の考察

以上では、鈴屋と曾々木地区でお話を聞かせていただいたその人自身の、またその人の子世代の結婚の事例を記述してきた。

これらの事例から看取できることは、まず、結婚年齢と通婚圏の変化であり、特に女性の結婚年齢の変化の著しさである。この点について、昔は「女性は20歳までに嫁に行かないと、ダラ（＝バカ）かと言われたので…」というCさんの話があった。1940年代頃までは、女性が19、20歳前に結婚するのは当たり前なことだと考えられていた。このあとからは、女性結婚の年齢はだんだん高くなって、今の時代に至って、26、27歳に結婚することも珍しくなくなった。実際に、もっと遅くまで結婚していない女性もある程度いる。また、通婚圏については、昔は近い村落同士、地区間の通婚に限られていたが、今では町野町外へと広がっている。

その理由として、実態面での変化と意識面での変化が挙げられる。「実態面」の変化というのは、戦後の高度経済成長に伴い、地方から都市部への全国的な人口の移動が起きたことである。また、社会の発展により、ライフスタイルが大幅に変化してきた。「意識面」の変化というのは、女性の社会進出が進むにつれて「男は仕事、女は家庭」という従来型の役割分担に対する意識が変化してきたことである。また、結婚をすることに対して、「結婚しなくても満足いく生活ができる」と考える人は、若年世代になるほど多くなっている。こうした変化が、結婚年齢の晩婚化と通婚圏の広がりという傾向の背後にあると考えられる。

次は、結婚相手の選択方式の変化である。1950年までの結婚は、いわゆる親と仲人の決めた結婚であり、当事者に配偶者選択の自由を認めていなかった。結婚式は、新郎と新婦の「夫婦の結合」を象徴するものではなく、二つの家の間の結合を象徴する儀礼であった。結婚する女性は、特定の男の妻と言うより、特定の家の嫁であるべきだと考えられてきた。また男性にしても、嫁取りが終った時点でも、妻たるべき女性がいかなる人格の持主であるかを了解していたわけでもなかった。すべては親と仲人が決めたものであり、特定の家からこの家に嫁に来た女性であるに過ぎなかった。しかし、1960年代に入ると、見合い結婚と恋愛結婚は半々になってきた。全国的に見ても、60年代後半に恋愛結婚に対する偏見も薄れて、お見合い結婚でも親の意思ではなく、個人の自主的な選択が重視されるようになっていた。そして、1970年代からは、恋愛結婚が主流へと向かいはじめ、現在では、恋愛結婚が一般的となっている。

こうしてみると、結婚は、家との結びつきから、個人のものとして考えられるようになってきているといえる。結婚もまた自らの選択肢のひとつであり、そうした意識も晩婚化に影響を与えているのだろう。そして、現在では意識だけではなく、町野町の結婚儀礼そのものが多様化している。

結婚儀礼そのものの多様化については、結婚式の挙式場所と儀礼の簡略化から看取できる。つまり、1960年代までは、新郎の自宅で挙式することは当たり前であったが、60年代後半からホテルへと移動しはじめ、今では結婚式場やホテルで行うことが一般的になっている。そして、結婚式場やホテルも人々のさまざまな要求に応えられるように、多様なプランを準備している。一方、仲人のいない結婚式や両親や親族があんまり関与しない披露宴など、昔と比べて略式の婚礼を行う者が多い。なかでも一番省略されている儀礼は結納だといえる。昔の結納は両家の結合を確認するための儀礼的な贈答慣行であったのが、今はほとんどの場合、金銭だけで簡単に済ませてしまっている。それだけ現代人にとって、結納とは面倒な儀礼と認識されているようだ。

また、伝統的な儀礼としてのナワバリ、水合わせなどについては、1960年代後半までは一通り行われていたが、70年代末には、詳しい人の説明を受けながら行われるようになり、80年代には略式で行われるようになってきたという変化が見られる。これらの伝統的な儀礼は、衰退しているように見えるが、以上の事例で示されたように、ナワバリなど伝統的な儀礼はある一定の方式で維持されている。現在の町野町の結婚儀礼は、全国的な形式と地域の伝統との複合だと言えるだろう。特に、私が聞き取り調査した時、ナワバリについてたくさんの人たちが詳しく話してくださった。時代の流れとともに、結婚儀礼に地域特色がなくなり均一的なものとなっていることが、かえって地元の人が地域独自の文化を認識し、そして誇りを持ち、地域アイデンティティ確立する契機となって、自分たちの伝統を維持するための努力がなされると考えられはしないだろうか。しかし、この伝統は、これからもほんとうにずっと残っていくであろうか。

V. おわりに

ここまで紹介してきた結婚の事例は、私自身が町野町の村落調査の過程で収集したものに限ったので、日本の婚姻儀礼を総括するものではありえない。加えて、資料には時間的、空間的な偏りがあるのも確かである。しかし、文化人類学の研究では、特定地域の文化現象見る一方で、全体社会との関連をつねに考えておくべきだと思うので、今回の調査を原点として、今後も日本社会の結婚儀礼がこれからどうなってゆくか、そうした変化をどのように捉えればよいのかを考えてゆきたい。